

アメリカ滞在記 ①

NJ(ニュージャージー)州での生活

霧野萬地郎

▼1977年にタンザニアから帰国して一年余りで米国へ赴任した。帰任直前の人事の問ひかけがあり、今後の仕事の希望は、職種は問わず勤務地を米国と答えた。技術系社員だったが、5年のアフリカ勤務は技術的に大いに遅れをとった。幸いにもこの希望は通り、米国はNJ(ニュージャージー)州での勤務となった。この滞在を皮切りに米国内の転勤も含めて、3事業場で通算12年間をダイナミックな米国で過ごす機会を得た。

▼最初の5年間のNJ滞在中は、家族を呼ぶ半年前に単身赴任し、住居と車の確保、それと、長男の学校選びなどを仕事の合間に急いだ。長女が日本で生まれ、家族は5人となっていた。長男(小2)の学校期末の事も考えて、家族の赴任時期は翌年の3月末とした。住居は日本人も住むハドソン川畔の町に賃貸用の家の一階を借りた。二階は新婚夫婦、地下室には独身イタリア男性が住んでいた。

この町には日本食料品店もあり、また、地域のスーパーでは必要品は何でも揃っていた。アフリカの様に見える人が居ないが、家は電化され、冷暖房は完備されていた。

また、この町からハドソン川の橋を渡ればマンハッタンの中心部へ30分の運転で行けるので、博物館、野球場、劇場などで様々なイベントを楽しむ事ができた。

▼国際免許証は持っていたので、実地テストは免除で、簡単な筆記試験だけだった。その教則本に「飲酒はビールひと缶までが適量」と記してあったが、今では駄目だろう。

妻は新たに車の免許を取得する必要があった。教師が家まで教習車で来て、いきなり路上で運転技術を教える。横に座る教師の足元には生徒と並んで、ブレーキペダルがあり、緊急時には踏める構造になっている。そんな車で初日から住宅地を抜けて、制限速度55マイルの車専用道路も走ったと云う。習得に一番苦労したのは縦型駐車だったとか、それでも、そんな教習を10回程繰り返し、OKとなり、筆記試験合格で免許証を取得した。車は5000CC 8気筒の大衆車「インパ

ラ」とした。サバンナのイメージから買ったのだが、初日に方向指示器のレバーが抜け外れ、その品質の悪さに驚いた。「月曜に作られた車は特に不良が多い」とディーラーも当たり前の様に話していたのには更に驚いた。

二台目の車は、丁度、米国を車で横断して来た従姉夫婦が帰国するとかで、処分を依頼され、それを一か月ほど乗りながら別の車を探し、中古車のフォード「グラナダ」とした。

▼長男は最寄りの小学校へ転入した。一クラス20人ほどで、日本人も数人いた。満身に英語を話せない生徒には特別にESL教室があり、別メニューで教えて貰

えた。流石に移民の大國で、この辺りのケアーは行き届いている。

日本人以外にも韓国やメキシコ、イタリアの生徒も受講していた。

▼最初のNJ滞在中は、5年間で家を3軒移った。その2回の引越は、貸主の気の毒な事情によるものだったが、その都度、子供らの



3軒目のNJの自宅

転校を余儀なくされた。

これには耐えられず、3件目は日本の預金をはたいて中古の家を購入した。当時の為替レートは270円程だったからかなりの負担だった。その頭金と銀行ローンを併せて購入資金とした。小さい家だがニューイングランド型で洒落た建物だった。場所はハドソン川畔に沿って北隣の閑静な町だ。住居が落ち着いた事もあって、その後、日本から両親たちがこの家を足掛かりに米国へ遊びに来た。この家で2年程過ごしシカゴへ再転勤した。

▼NJには1991年にシカゴと日本を経由で再赴任した。この時は4年間滞在して、住居はハドソン川畔に新築の低層集合住宅を購入し、引越しによる煩わしさを避けた。

家を購入する時は価格の20%程を頭金として、残りは35年返済の銀行ローンを組むと、毎月の返済金額は家賃より少し高めになるが、支払い当初はその殆どは金利分(当時は10%以上)だ。この国では、金利の支払いは所得控除されるので、年末の確定申告で、支払金額の5割以上が戻ってくる。その理由は銀行からの税金と返済者のからの税金が

二重課税となるからだそうだ。その還付金は家族旅行の資金として大いに助かった。

▼いずれにしても、苦労を掛けた子供たちの転校以外は、NJの豊かな四季には恵まれ、広々とした環境での快適な私生活だった。再赴任時には長女は多感な中学生になっていたので、馴れた日本からの転校は辛かったと思う。

▼NJ州はアパラシアン山脈が走り、起伏の富んだ地形なので、四季を通じて自然を楽しめる。車で30分も走れば、家族で遊べる森林公園やキャンプ場がある。子供が遊べる公園は家の前にもあった。車で一時間ほど走れば、日本にも負けない花見の出来る所もあった。



Branch Brook Parkの花見

▼NJ州には エジソン博物館が近くにある。スズ箱の蝋管電蓄や、京都の竹をフィラメントで成功した電球など最も初期のものから、映画や電話などの事業を立ち上げた偉業の

数々が展示されている。彼の睡眠は3時間ほどで、エジソンが息絶えた仕事機の展示は印象深い。彼の事業への執着とパイオニアの気概を注入される思いだった。

▼最初のNJでの仕事は3 in 1 (ラジオ・テープ・レコードの3機能を一体化したオーディオ機器)の営業と商品企画だった。大きな米国本社の一部門だが、巨大市場でこの部門の生き残りを賭ける。しかし、ビデオ機器の登場でオーディオ市場は縮小の最中だった。加えて貿易摩擦、更に、円高への為替変動など、大きな荒波に揉まれた。日本側とは昼夜反対の時差を越えて連絡し合い、対応を図る。米国の為と云うより、日本側の事業の前線との認識になる。これは途上国タンザニアの工場での仕事とは全く異なった。そして駐在4年後には、遂に、私を送り出した日本側の事業体は無くなり、根無し草になった。

帆船のパレード七月四日晴れ

大晦日年始挨拶時差電話

続く